

## 佐々木秀一教授を送る

著者	梶浦 善次
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	16
ページ	1-2
発行年	1982
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001870/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001870/</a>

## 佐々木秀一教授を送る

学 長 梶 浦 善 次

佐々木秀一教授は、明年3月で停年となるので、本年度の研究紀要を、その退官記念号とすることが、研究紀要委員会から提案された。私はこの提案に狼狽に似たものを感じたのであった。教授を正式に本学に迎えてから3年に過ぎず、まだまだ現役としてご活動いただけるものと信じていたので、退官が話題になることを知らされ、はなはだ惜しく、残念であるという思いが先に立つのである。

私が、佐々木教授を知ったのは、北海道学芸大学札幌分校に奉職していたときであった。学芸大学初代の学長田所哲太郎先生は一先生がこの短大初代の学長であったことは改めてふれる必要はないだろうー、発足したばかりの大学の教授陣容を充実するために、東奔西走されていた。とくに先生は郷里の秋田に出かけ、同郷の人材を物色され、その眼鏡にかなったのが、わが佐々木教授であった。教授は秋田大学学芸学部勤務され、すでに附属幼稚園、小学校、中学校主事なども兼任され、もっとも嘱望されていた若手の助教授であった。郷土出身の大先輩の三顧の礼にほだされて、教授は北海道に渡ることを決意されたのであった。このようにして私は佐々木教授と机を並べ勤務することとなったのである。

昭和30年、先生は学芸大学釧路分校に転勤され、私もまた間もなく新設の札幌旭丘高校に校長として転出、しばらく疎遠がつづいた。私は先生が札幌に帰って活動されることをかねて願っていたが、釧路における先生の役割は重く、またそこでの附属学校の新設もかなりおくれ、ついに釧路で停年を迎えられたのである。先生は退職とともに札幌に移られたが、釧路分校の運営における重責と附属学校の新設と運営などの激務のため療養生活をつづけねばならなかった。昭和55年、ようやく健康を回復された先生を、正式に本学に迎えることができたのである。

先生が本学に着任されてからの短い期間に、本学に対して寄与されたものはきわめて大きい。先生は私に代って初等教育学科の教育学と教育原理を担当されたが、その講義計画の周密であり教材の用意などもきわめて親切なものであり、この点だけからでも、先生の本学への就任がおそくなったことは、大きな損失であったと感じたのであった。教職課程委員会の委員長としてなされた足跡も大きい。それまで習慣的に実施運営されていた委員会の運営や機能を明確に成文化し、実習対策室と一体となって、今日の行き届いた教育実習ができるようになったのは、先生の教員養成における経験に由るものであった。第三に初等教育学科の科長としての重責をあげなければならない。長い間にわたる教員養成の豊かな経験とその温厚で着実な人柄と相まって科の円滑な運営に当たられた。本学運営の基本方針や問題の所在が適確に科の会議に伝達されるとともに、科内における意見は誤りなく表現された。このような科の運営は決して1日にしてなったものでなく、経験の上に、先生の周到な思考とその人柄とが加わってはじめて

可能となったものであることを、私は感じたのである。先生は着任とともに、学則や研究紀要を丹念に検討されて、公立とちがった私学の特異性やまた短大運営の問題点などを適確に把握されて、その上に立って仕事に取りくまれたのであった。私は先生によって改めて教えられた問題が多かったことを思い出すのである。先生は自らを主張する人ではないが、人の言うことに耳をかたむけ、さらによく考えて自己の判断をする。そしてその上で発言されるのであり、その意見や発言は、大学の運営において盤石の重みをもったのである。

個人的なことであるが、上にのべた公的な貢献のほか、私は先生より受けた知的刺激の大きかったことを感謝せずにはおれない。先生は、はじめ東京高等師範学校で体育を学んだが、当時より抜群の技をもっており、体育の講習会では教授の助手とし活動し、模範的な演技を披露したのであった。卒業とともに中学校に勤務したが、教師としての学問的基礎を求めて東京文理科大学の教育学科に入学されたのである。先生はここでは西田哲学やヘーゲル哲学などを研究され、体育の哲学的理論を建設すべく努力されたのであった。先生はまた学芸大学時代にデューイ研究の成果を「デューイの教育哲学」として出版されたが、それはわが国におけるデューイ研究の水準を示すものである。

戦後、新しい民主的教育のための指導者の講習（I.F.E.L）が開かれ、たくさんのアメリカの学者が来日してその指導に当られたが、そのひとりセント・ルイスのワシントン大学教育学部教授バルー（R.B. Ballou）教授はその著書「The Individual and the State—Modern Challenge to Education」において、国家と個人の関係における教育目標の図示について日本の佐々木秀一教授に負うものであることを1ページのかかなり部分をさいて説明している。これはアメリカの学者の良心とともに佐々木先生の思想の豊かさを示すものである。先生にはまた「鬼手佛心—ある応召将校の手記」や「桐の葉の蔭に学んで」などの著書があるが、いずれも学生時代の旧師に対する愛情や戦地における体験や人との出会いなどを語ったものであり、先生の人間性の広さと深さを示すものである。

先生の研究は体育、教育学、哲学、宗教（佛教）にわたり、つねに知的な刺激に富む話題を提供されたのである。また私たちに共通な話題となる新聞記事や論説あるいは読書の要約などを複写してもって来られた。先生からいただいたもので、私のファイルは2冊位いになっているのである。新鮮な感覚をもってつねに学問的刺激をしていただいたことに対しても、私は深く感謝するのである。

私はその学識と人間性において尊敬する同僚、大学運営の練達の士である佐々木教授を送ることはまことに残念である。狼狽を感じたというゆえんである。私は、佐々木教授が、今後一そうのご自愛とご健康を祈るとともに、ご健康であるかぎり、さらに永く本学のためにご援助、ご協力をくださるようお願い、この文章を止めるのである。